

[36\_4] 図書館情報 : 九州大学附属図書館報 :  
36(4)

<https://doi.org/10.15017/10680>

---

出版情報 : 図書館情報. 36 (4), pp.55-78, 2001-03-31. 九州大学附属図書館  
バージョン :  
権利関係 :



九州大学附属図書館報

# 図書館情報

The Kyushu University Library Bulletin

Vol. 36, No. 4 (2001)

## 目 次

附属図書館の目標と当面の課題.....	55
高麗大学校中央図書館及び梨花女子大学校中央図書館訪問.....	60
新入生に薦める本	
「中東イスラーム読書に至る」.....	62
「余暇学」にせまる - 余暇本質論の思想 - .....	63
紅山雪夫著『ヨーロッパの旅 城と城壁都市』.....	64
「小林秀雄をお読みなさい」.....	65
先輩から新入生のみなさんへ	
浪漫的図書館利用のススメ.....	66
情報サロン工学部分室の紹介.....	66
バイト生から見た図書館について.....	67
「本」を捨てた後で.....	67
平成12年度研究開発室の活動について.....	68
学生用図書（参考図書）の整備・充実について.....	71
平成13年度開学記念・附属図書館の開放について.....	72
平成13年度附属図書館開館等スケジュールについて.....	73
自著紹介.....	75
本学関係者著作寄贈図書.....	77

## 附属図書館の目標と当面の課題

附属図書館長

有 川 節 夫

九州大学附属図書館では、平成12年11月に、研究院・学府・学部、研究所等の各部局に対して総長から出された要請に応じて、「中期目標・中期計画」を策定した。また、その前年の平成11年11月には、同様に総長からの要請に応じて、中期目標を中心に、重要な項目の洗い出し、短期・中期・長期課題の設定を行った。それ以来、附属図書館商議委員会において毎回こうした附属図書館の目標と課題について検討を加えることにしている。平成12年度に策定し提出した「中期目標・中期計画」は、「各組織の変

遷と改革の到達点」、「長期目標または理念」、「中期目標と中期計画」という3つの指定された項目からなる。このうち附属図書館の変遷と改革については、毎年刊行している九州大学附属図書館要覧にあるので省略し、残りの2つの項目について、若干の文章上の修正を加えて、原文通り以下に記載しておく。

### 1. 附属図書館の目標

大学図書館基準（昭和27年制定、昭和57年改定）では、大学図書館は、大学における教育研究の基盤

施設として、学術情報を収集・組織化・保管し、これを利用者の研究・教育・学習等のための利用要求に対し、効果的に提供することが主な機能であるとしている。本基準は、大学図書館の在り方を端的に示しており、本附属図書館にとっても当然第一の目標である。

また、最近の情報化社会・ネットワーク社会の進展を見ると、平成8年に学術審議会から出された「大学図書館における電子図書館の機能の充実・強化について」という建議でも指摘されているように、従来の紙媒体での学術情報の収集・組織化・管理・提供という図書館機能に加えて、学術情報の創造・発信とその世界規模での共有という新たな機能を充実させることが今後とりわけ重要である。また、建議が出された時点では顕在化していなかったオンラインジャーナルへのアクセスを確保するという情報配信機能の整備も、それ以降の急激な電子化・ネットワーク化の動きにより、必須の研究図書館機能として強く要請されるようになってきた。こうした電子化資料の整備を進めていくことが、第二の目標である。

九州大学は研究機能と研究者養成を重視する研究大学をめざして、研究院・学府・学部と研究所、病院、センター群等を基本にした新しい大学組織を構築し、これからの時代に適応できる教育活動、研究活動、組織運営の活性化を図りつつある。そのなかで、例えば、アジア重視、大学教育研究機能の総合的活用といった方向性も具体化されようとしている。そうした九州大学の新しい機能と組織に対応した大学図書館を構築・運営し、大学改革と活力ある大学づくりに積極的に寄与することが、第三の目標である。

附属図書館は、こうした基準や建議に謳われている理念および九州大学の目的・目標を忠実に実現・実施するために、次のような三つの観点から図書館機能の充実を目指す。第一の観点は、学生にとっては、学習と情報収集のために行かずにおれなくなる

ような学問的な雰囲気と活気に満ちた学習図書館を実現することである。第二の観点は、研究者にとって、体系的な蔵書構築と豊富な研究資料が確保され、ネットワーク社会の恩恵を存分に享受できる機能的で充実した研究図書館を構築・運営することである。さらに、第三の観点として、ある種の経営感覚を備えた事業体としての大学図書館の運営を模索することも重要である。

## 2. 附属図書館の当面の課題

上記のような目標を実現するために、当面以下のような課題に取り組む必要がある。

### (1) 将来計画の策定と実施

全国の大学図書館に共通した法人格取得や定員削減の動きに加えて、本学附属図書館では、新キャンパスへの統合移転が控えている。これらの問題を同時に解決するための基本計画を、図書館関連の新しい技術の動向や可能性も視野に入れて綿密に策定しておく必要がある。そのために、既に設置されている「附属図書館の将来計画に関する検討委員会」を中心とした基本計画の策定を急ぎ、変動する不確定条件にも対応できる仕組みを作っておく必要がある。統合移転に向けての準備作業として、また、図書館業務の省力化のための基本的な作業として、まず、目録データの遡及入力を早期に完了する必要がある。本学で平成12年度に導入された教育研究基盤経費からの特別な予算措置により、今後5年間でこの事業を完成させる財政的な支援を決定していただけたことは、特筆すべきことである。

### (2) 図書館組織・機構の再編

筑紫地区は、約1000名の学生や研究者を擁する本学の主要キャンパスの一つであるが、未だに図書館分館が設置されていない。そのため、利用者に、特に学生や留学生に十分な図書館機能が提供できず不平等感と不自由な思いを強めている。この筑紫地区

分館を早急に実現しなければならない。また、狭隘化している医学分館の増築も急がれる。医学分館は、医学・歯学・薬学系の総合図書館として、また、医歯薬系の九州地区における中核的拠点図書館としての機能の強化に加えて、病院を通じて社会との接点が多いため、社会連携という視点からの整備充実も強く望まれる。

平成12年度に設置された情報基盤センターの事務部や附属図書館事務部、部局図書掛等を含めた学術情報系事務組織の一元化・集約化も重要な検討事項であろう。また、図書館組織を機能面から再編し、庶務経理部門、専門司書部門、研究開発部門に区分けして、新しい時代の多様なニーズに迅速かつ効果的に対応できる体制を検討することも必要である。特に、専門司書部門を顕在化させ諸外国並みに整備することは、日本の大学図書館に共通した重要な課題である。

### (3) 財政基盤の確立

附属図書館の運営経費や図書資料費等は、文部(科学)省からの配当(図書購入費、図書館経費、特殊装置維持費等)の他、学内校費振替(経常的経費と臨時的経費)や教育研究特別経費(総長裁量経費)受益者負担金等によって賄われている。新しい予算制度のもとでの振替制度の確立と分館・部局図書室を含めた附属図書館全体での一括措置が望まれる。また、学習図書館機能の基本である学生用図書・参考図書を格段に充実させるための継続的な特別予算措置が強く望まれる。

一方、外国雑誌の一括契約・購入による重複調整、オンラインジャーナル等の電子的図書資料の一括契約・導入を推進して、大学全体としての経費の節減に努め、全学的見地から予算を効率的に運用することも必要である。そのための仲介役として働くことも、図書館側に期待される重要な役割であろう。

図書館における研究開発には、学内や図書館にある貴重な図書資料や学術文献の電子化や新しい大学

図書館・電子図書館に関連した図書館情報学的な研究開発がある。こうした研究開発のための財源も必要である。研究開発室の研究者による競争的研究資金の獲得も期待される。

### (4) 学習図書館機能の充実

高度な研究者・技術者を養成する能力を有した研究大学を活性化し、強化するためには、遠回りのようであるが、学生、特に学部学生が主体的かつ積極的に勉学に没頭できる知的な環境を整備することが効果的である。そのためには、学生達が学習と情報収集のために日常的に利用できる空間・装置としての充実した大学図書館を整備することが肝要である。大学図書館という公的でオープンな空間で学習することによって、同年代の学生相互間で学問的な刺激を与え合い、学問的雰囲気と活気に満ちたキャンパスが生まれ、そうした雰囲気と活気が次第に学内全般に増幅・伝播していくと期待できるからである。

このような空間・装置としての学習図書館には、体系的で網羅性のある蔵書構築が基本である。また、学習・調査・研究の目的ごとに選べる多様で機能的な閲覧机やパソコン、情報コンセント等の情報関連機器の整備や、各種の視聴覚施設の整備、特に留学生のための母国の衛星放送を受信できる設備等も一層の充実を図る必要がある。

### (5) 研究図書館機能

研究図書館機能としては、次項で述べる電子図書館機能に目を奪われがちであるが、伝統的な紙媒体を対象にした機能の整備を怠ってはならない。貴重図書や大型コレクションを始めとする研究図書の体系的な蔵書構築を行うために予算措置も含めた方針と方式を工夫する必要がある。また、収集された蔵書の目録データベース作成等の基本的な事業と蔵書の劣化防止のための具体的な計画を策定し、適切な処置を施す必要がある。そのためにも貴重書庫の整備を急がねばならない。

大学図書館の図書は研究者のそれぞれが利用するとともに多数の研究者が共同して利用するものである。しかし、この共同利用という面では学内外の相互利用を含めて必ずしも十分に機能していない。それには利用者の意識や技術的な側面などさまざまな要因が絡んでいる。共同利用を推進する観点から、システムその他の検討を行う。また、大学図書館の図書は次世代の研究者のためのものでもある。今だけではなく将来のために優れた図書を備えることについての啓発活動が大学図書館の大切な任務となっている。

#### (6) 電子図書館機能の充実・強化

図書館の電子化と電子図書館機能の整備の第一歩である図書目録データの入力に関しては、前述したように本学ではその短期間における完全実施に向けての予算措置が認められたところであり、新規受入図書の目録データは自動的に入力されているので、統合移転前にすべての入力作業が完了する見通しである。それによって、移転期間中の図書の所在に関する混乱を避けることができるだけでなく、電子図書館機能の充実・強化へ向けての次のステップへ踏み出すことが可能になった。

また、平成12年度発足の情報基盤センターとの組織面を含めた様々な協力関係により、電子図書館機能実現のための基盤は格段に整備強化された。この基盤の上に、貴重図書や研究成果等の電子化といったコンテンツ開発と情報発信の事業を組織的に推進する段階にある。さらに、オンラインジャーナルの本格的な導入・サービスという情報配信に関わる様々な制約の解消や制度の整備は、電子図書館機能を享受するために解決すべき重要な課題であり、全国・地域レベルで大学図書館が連携・協力して取り組む必要がある。具体的には、複数の大学間でコンソーシアムを構成してオンラインジャーナル等の共同契約・導入や複数年契約等、会計制度に関わる重要な問題の解決に取り組むことが強く求められている。

#### (7) 図書館業務の改善

最近、様々な業界で注目されている「物に情報を貼る」という新しい技術を発展させ、適用することにより、図書館における図書の受入から貸出、返却、点検、管理、配架に至るまでの様々な業務を効率化・自動化できる可能性が急浮上してきた。研究開発室の主要テーマの一つとしてこの技術に取組み、新キャンパスにおける図書館に取込めるかどうかを早急に見極め、必要があれば図書館の設計に反映させなければならない。この技術には、図書館の24時間開館の実現等、学習・研究図書館としての機能に大きく貢献できる可能性がある。

また、現在、分野・部局ごとに異なっている図書の分類に関しても検討を加え、分類法の整備・統一へ向けての検討作業も急がねばならない。

#### (8) 図書館における教育と研究

大学図書館の重要な役割として参考調査がある。情報社会・ネットワーク社会の定着とともに、その役割に大きな変化が生じている。参考調査の対象が単に内外の図書館内に留まらず、文字通りグローバルに分散した Web 上の学術情報に及ぶことも少なくない。

そこで、主に新入生を対象にした、図書館における情報探索やインターネット上での情報探索を始めとする各種の情報探索技法から、インターネットの使い方、情報社会における基礎的な法と倫理等に至るまでの「情報リテラシー教育」へ関わっていくことが参考調査の新しい仕事として期待されつつある。こうした情報リテラシー教育に図書館職員が情報科学・情報社会学関連の教官や情報基盤センターの教官等と連携して関与することを検討する時期にきている。

附属図書館には、平成8年度に学内措置で研究開発室が設置され、貴重書の電子化やそのための情報技術等を中心に研究開発を行っている。平成11年度には、助教授1名の学内運用定員が認められ、図書

館専任の教官として図書館の電子化と電子図書館に関する具体的な研究開発に従事している。目録カードのイメージ入力とその検索システムを研究開発して一般利用者の利用に供するなど、既に全国から注目されるいくつかの顕著な成果をあげ、こうした専任の教官の重要性を証明している。大学図書館における研究開発機能の重要性は、大学図書館基準でも指摘されている通りであるが、情報化・ネットワーク化が加速度的に進展する現在、そのための組織体制の整備充実、特に専任教官の増員が強く望まれる。また、附属図書館の専任教官と情報基盤センター電子図書館研究部門の教官との連携協力も必要である。

#### (9) 社会連携・国際連携の推進

大学図書館にも地域への開放、地域との連携、国際連携が要請されている。そのためには、日本の基幹大学に相応しい蔵書構築を行うことが基本であるが、地域に関連した情報資料の電子化・展示・公開、地域の図書館との相互利用協定の締結、アジア諸国及び欧米の大学図書館との交流協定締結等に取組む必要がある。新キャンパスの図書館における社会連携、筑紫分館（仮称）における先端科学技術研究センターに関連した産業界との連携、医学分館における社会連携等について具体的に検討する必要がある。また、永年に亘って外国雑誌センター館としての医学分館が主として東南アジアの研究者に対して行ってきた文献複写サービスや国際的な ILL サービス等もネットワーク社会と関連付けて再度検討するべ

きであろう。

さらに、附属図書館の活動や問題点を広く理解してもらうために、ホームページや図書館情報等の逐次刊行物を充実させ、広報活動と情報公開に努めることも重要である。国際化に対応するためにホームページを始めとする英文による広報活動にも力を注がねばならない。

#### (10) 点検・評価システム

附属図書館では平成12年度に自己点検評価を行い、広範囲の利用者を対象にしたアンケートも実施した。この自己点検評価と利用者アンケートをもとにして、学内外の有識者による外部評価も行った。こうした点検・アンケートを定期的実施し、到達度も含めた厳しい外部評価を得て、その結果を図書館の運営に反映させるという循環を定着させる必要がある。

また、民間で行われている目標評価管理制度等を参考にして、各職員が自分の職務を的確に把握し、その達成に関する評価の意識をもつように心がけることも必要であると思われる。

このような附属図書館の活動や改革の方向を明確にし、事業体としての感覚を維持するための試みとして本年度から附属図書館商議委員会における予算・決算の審議は、「事業計画・事業報告」を前面に押し出して、それに基づく予算・決算という形で行うことにしている。

(ありがとう せつお 大学院システム情報科学研究所)



## 高麗大学校中央図書館及び 梨花女子大学校中央図書館訪問

山口良子

### はじめに

平成12年11月17日 - 19日という日程で、高麗大学校及び梨花女子大学校の中央図書館を見学する機会を得た。両校とも、日本語に長けた職員の方が対応して下さり、各部門の担当者の方との通訳までしていただいた。忙しいなか時間を割いて下さったスタッフの方々には、心から感謝している。

今回、この場に紙面をいただいたので、印象に残った点を中心に、簡単にレポートしてみたい。

### 高麗大学校中央図書館

高麗大学校は1905年創立で、延世大学校と並ぶ有名私立大学である。12の単科大学からなり、学生数は約25,000人で、1,700名以上の教員を抱えている。大学の蔵書数は、約160万冊。

ソウル市北東部に位置する本校キャンパスは、傾斜地になっており、正門からキャンパスを見上げると、欧州の古城もスクヤといった風情の外観を持つ校舎が木立の中に見え隠れしている。

この本校キャンパスにある中央図書館は、新旧二つの館から構成されている。古くは各学部図書室が散在したようだが、現在ではこの2館に集約されるに至っている。旧館は主として保存図書館のような役割を果たしている。

新館正面から館内に入ると、まず入館管理ゲートがあるのは、九大中央図書館と同様である。入館に際しては、学生証を入館管理システムに提示することでゲートを通過し、入館する。

図書の分類には、従来、東洋書にKDPC（韓国十進分類法）、西洋書にDDC（デューイ十進分類法）が使用されていたが、1999年よりDDCに一本

化されている。理由は、KDPCでは、資料の分類に対応できなくなったことと、将来的には、東洋書と西洋書の混配を目標としているためである。

本の配架は、開架と書庫に分かれており、開架室には、約8万冊の図書が配架されている。書庫には、大学院生以上が入庫することが可能で、学部学生は、目録（漢籍を除く蔵書の95%が遡及入力済み）を調べ窓口で出納依頼をして利用するようになっている。私たちが見学したときには、出納受付窓口では、4人のアルバイト職員が対応に当たっていたが、利用者が途切れることのない様子であった。

書庫は、製本雑誌が整然と並んでいるのが印象的である。雑誌は利用者に提供する分と保存用の2部購入しているとの事で、逐次刊行物室へ配架分は3ヶ月経過すると廃棄し、もう1部は製本用に書庫に配架している。

開架閲覧室の貸出・返却カウンター近くには、セルフサービスの貸出・返却機が設置されていた。それほどカウンターが混雑していなかったためか、実際に利用者が使っているところは見かけなかったので、どの程度利用に堪えるものかは不明だが、カウンターの混雑緩和の一助になるのだろう。

開架閲覧室に置かれている、OPAC検索用の端末は、全て立ったままで使用する形式になっていた。椅子がない分省スペースで、多くの端末が設置できるのが理由の一つ。

電子ジャーナルは、現在購入・非購入合わせて3,500種あるが、そのうち韓国国内のものは600種。学外からのアクセスは制限されているが、学内からはネットワークを通じて誰でも自由に利用できる。



高麗大学校中央図書館新館 右手奥



自動貸出・返却機

旧館には、高麗大学で取得された学位論文と、貴重書を含む古典籍、東亜日報の原紙が保管されている。

旧館では、古典籍の書庫に特別な空調設備などは設けていないが、もともとソウルは湿度が低く本の保存に適している上、壁が土蔵のように厚いため非常に良好なコンディションで保管できるとのことであった。貴重書庫は、古典籍の書庫の一部に設えてあったが、壁で完全に仕切ってしまうのではなく、壁の上部は格子になっていて、風通しを考慮していたようだった。消化設備は、ハロンガス。

高麗大学校は、次の訪問先の梨花女子大学校とは好対照で、スタッフも建物も重厚な印象を受けた。

## ● 梨花女子大学校中央図書館

梨花女子大学校は、1886年アメリカ人伝道師B・スクラントン夫人によって設立された名門女子大学である。14の単科大学からなり、学生数は約18,000人。蔵書数は約110万冊。

ソウル市北西部に位置するキャンパスは、高麗大学同様傾斜地になっていて、木立が多い。中央図書館は、かなり小高く勾配が急なところに建っているため正面入口は2階になる。ここも入口には、入館ゲートがある。正式には、100周年記念中央図書館と言い、現在の建物は創立100周年を記念して建設されたもの。

この大学図書館は、韓国で最も早く図書館業務の電算化を実現した。現図書館業務システムは、1989年自館で独自開発したものである。システムの老朽化が目立つ現在、業者と協力し新図書館パッケージシステムを開発中。

資料構成上の特色としては、「女性学資料室」がある。女性学関係の図書14,000冊のほか、雑誌45タイトル、新聞2種を有する。また、「北朝鮮資料室」もあり、北朝鮮の出版物を韓国で複製製本したものを収蔵している。北朝鮮と韓国の比較研究には欠かせないものとのことで、韓国政府の許可のもとに設



梨花女子大学校中央図書館



自由閲覧室PCコーナー

置されている。

貴重図書室は、常に湿度40%が維持できるように、空調装置が24時間稼働している。1900年以前のもものが収蔵され、その3分の1がマイクロ化済みだが、現在は電子化に力を入れており、50冊がすでに電子化されている。貴重書の電子化は、デジタルカメラで撮影したものを元にして構成され、Web上に展開した電子図書館でも公開されている。

電子図書館では、貴重書のほか、梨花女子大学校で取得された学位論文、女性学文献などを電子化して公開している。学位論文は、著作者の同意を得たものを公開しており、プリントアウトも可能である。同意の内容によって、全文の公開がないものもあるので、目次・レジュメ・原文の有無が画面上で容易に確認できる。データは、論文をスキャナーで取り込み作成しているが、挿図などは、別ファイルを作成し、鮮明に見ることが出来るよう工夫している。

1階にある自由閲覧室は、館内で最も利用者で混雑している場所と言える。利用者用パソコンが設置されており、レポートを仕上げる学生などが列を作って順番待ちをしていた。学期中は24時間利用が出来るが、防犯のため深夜から早朝にかけて施錠され出入りが出来ない時間帯がある。また、同じフロアにはノートパソコン室が設けられ、ガラスで区切られた一室には、各自ノートパソコンを持ち込んで使えるよう配慮されていた。2階にある参考図書室では、利用者用に10台のノートパソコンを用意し、貸出している。美術資料コーナーには、利用者用のスキャナーが設置されていた。

大学の方針として、図書館のプロジェクトには積極的に予算を計上しているとのことである。女子大ということも関係しているかもしれないが全体として、スタッフも建物も明るいイメージのある図書館である。

(やまぐち りょうこ  
情報システム課データベース掛)



## 新人生に薦める本

### 「中東イスラーム読書に至る」

大 稔 哲 也

おそろしいことである。大学入学後<sup>にさん</sup>二三年の読書が、その後の人生の知的ベースをほとんど形づくってしまうとは。(いや、人によっては、高校時代にそれを終えているかも知れない。)専攻へ進んでは専門の書物を読み、卒業後に趣味の読書をするにせよ、それ以外の知的な蓄積はほとんどこの時になされるのだ。そして、そのことを誰も私には言ってくれなかった!いや精確には、己を<sup>おのれ たの</sup>持み、耳を貸さなかっただけだろう。そして、老いにまでは思いが至らなかったのだ。

私は、大学入学式後のクラスでのオリエンテーションにおける自己紹介を想い起こす。今から23年も前のことだ。その時、同級の能田という男はこう言った。「僕は書いたものを通じてしか自己を表現できないので、書いたものを読み上げることにします。」何ということだろう。文学部に属した<sup>おきら</sup>私達の、ほとんどが就職による社会的栄達をとくに諦めていた。みな小説家になることしか頭になかったのだ。それから毎夜、誰かの下宿で徹夜の文学談義が始まる。私自身も、日々の生活に最も欠かせない音楽はさておき、哲学を基点として文学、人類学、宗教学、心理学等へと読書を拡げていった。そして、結局、恩師の言葉に示唆を受け、歴史学専攻を選んだのだ。

このような筆者が曲折を経て九大文学部史学科へ赴任すると決まった際、真先に頭に浮かんだのが、作家島尾敏雄のことである。島尾は九大東洋史の出身で、その卒論は『元代回鶻人の研究一節』であった。これは、昨今であれば、筆者の所属するイスラーム文明史学講座へ提出されて何らかしくないテーマである。卒論中の島尾は「アラビヤ人」にもしきりと言及している。私は日本語の書き手としての島尾に、それこそ大学入学時から親しむ者であり、彼についての私見を温め続けている。彼こそ、手法を様々に変えつつも、ついに“歴史作者”すなわち、後代になって歴史史料となるような作品の著者であり続けたのではないかと。

さて、以下は編集部要望に応え、私の専攻する中東イスラーム世界に関連する図書を若干でも紹介しようと思う。まず、筆頭にE・サイード著『オリ

エンタリズム』(平凡社)が挙げられる。「キリスト教徒のアラブ」にして、アメリカの大学で英文学を講ずるサイードのこの著書を読むことを免れうる者が、もはや今日いるだろうか。また、現在、中東研究者以外の読みの方が真摯であるように思える。

ついで、井筒俊彦『イスラーム文化』(岩波文庫)には、多くの重要な論点がちりばめてある。日本で10年前に喧伝され出した「イスラームの都市性」は、すでにここで喝破されていた。同『意識と本質』(岩波文庫)も含め、議論の当否は別として、幼少より禅に<sup>な</sup>馴染んだ著者ならではの明解な語り口で東西の文献が<sup>しゅうりょう</sup>渉獵されてゆく。

旅好きには、マルコ・ポーロをはるかに<sup>しの</sup>凌ぐ大旅行家、イブン・バトゥータの『旅行記』を推す。家島彦一訳(平凡社東洋文庫)が学問的に優れるが、前嶋信次<sup>ふくいく</sup>訳『三大陸周遊記』(角川文庫他)の日本語の馥郁たる味わいも捨て難い。前嶋自身の著作に関しても、現在、平凡社などから刊行が相次いでいる。

文学好きには、『アラビアン・ナイト』(平凡社東洋文庫)を挙げよう。読者が読み終るまでに死んでしまうといわれる大部なものであるが、良質の導きの書としてR・アーウィン著『必携アラビアン・ナイト』(平凡社)もある。著者アーウィンは中世イスラーム史研究者であったが、ついに中世エジプト社会を舞台とする創作『アラビアン・ナイトメア』(国書刊行会)の方へと向かってしまった。

一方、日本では児童文学として高い評価を受けているラフィーク・シャミー(邦訳ではラフィクシャミと表記)だが、『蠅の乳搾り』(西村書店)ではシリア・ダマスカス出身のアラブ・キリスト教徒として、哀感を込めて中東の庶民生活を描き出した。さらに、中東を舞台とする自伝には実に優れたものが多い。ハムザ・ウッディーン『ナイルの流れのように』(筑摩書房)、アイニ『ブハラ:ある革命芸術家の回想』(桃源社)を導入として挙げておこう。

最後に、中東からはそれるが、九州であるからこそ敢えて貝澤正『アイヌわが人生』(岩波書店)を奨めたい。同書を読むことと、上記の諸書を読むことはそれほどかけ離れているとは思われない。また、そこには先住民族としての共存を認めず、聖地を爆破してダムに沈めるなど、我々がいまだに加担し続ける犯罪があぶり出されてもいよう。

(おおとし てつや 大学院人文科学研究院助教授)

## 「余暇学」にせまる - 余暇本質論の思想 - 野田 進

新年度が始まり、新入生が張り切って勉学に打ち込もうというこの時期に、余暇とは何ですかとおしかりを受けそうである。それも、厳しい経済環境の中で個人の仕事の成果こそが問われるという、この時代に。いや、そうではない。余暇の理論は、そういった常識を根底からくつがえし発想の転換をせまる力を有する。およそ人々の常識や価値観を揺るがしうる知識の体系を学問というならば、余暇の理論は、「余暇学」と称するに値する。以下のごとしである。

労働時間の短縮や個人消費の拡大という課題を背景に、日本人の休暇を促進する施策が講じられるようになって、すでに久しい。その間に、年休日数が拡大され、計画年休制が導入されたり、国民の祝日を連休にするなど、さまざまな工夫が試みられた。しかし、労働時間はある程度短くなったが、こと休暇に関する限り、ほとんどの施策は成功していない。休暇の取得率は以前と変わらず低調で、取得日数もわずかしこ増加していないのである。日本人には、長期の連続休暇をとる慣行はほど遠い。また、中国や韓国でも長期休暇の習慣が見受けられるから、休みを取らないのをアジア的（農耕民族的）風習とも決めつけられない。このように考えると、問題の背景には、休暇の制度や施設といったハード面だけでなく、余暇観や労働観といった物の見方が横たわると考えられる。ヨーロッパを中心に発達した休暇の慣行を背後で支えてきた要因のうちには、日本で考えられている余暇の意味とはかなり異なる、独特の余暇文化の実りがあるのではないか。そこで、ヨーロッパ休暇論の古典とされている、二つの本をひもといてみよう。

まず、1880年のフランスで発表された「怠ける権利」という論文（ポール・ラファルグ著（田淵晋也訳）『怠ける権利』1972年、人文書院）は、当時の大衆に爆発的な人気を呼び、ヨーロッパのさまざまな言語に翻訳・出版され、各国での労働時間短縮の運動に大きな影響をもたらしたといわれる。この本の主張は、最初から最後まで、「人々よ怠けよ」と説くことにある。冒頭にいわく、「資本主義文明が支配する国々の労働者階級はいまや一種奇妙な狂気にとりつかれている。その狂気のもたらす個人的、社会的悲惨が、ここ2世紀来、あわれな人類を苦しめつづけてきた。その狂気とは、労働への愛情、すなわち各人およびその子孫の活力を涸渇に追いこむ労働に対する命からがらの情熱である。」そして、

結びの下りでは、「おお、《怠惰》よ、芸術と高貴な美德の母、《怠惰》よ、人間の苦悩を癒したまえ！」とくる。労働を嫌忌し、怠惰を賛美するわけである。

ところで、この本の解説によれば、著者のラファエルは、あのカール・マルクスの女婿で、叙述のなかには「資本論」の引用もみられる。だが、この反労働という主張が、マルクスの社会主義の立場にほど遠いものであることは明らかである。ラファルグは、労働者が「労働の権利」を主張し、あるいは「働かざるものは食うべからず」などの標語を掲げるのを、「馬鹿げたプロレタリアートの考え」と落胆さえしている。労働の神聖視、あるいは労働に対する熱狂を植えつけ、怠惰を敵視する思想は、支配者とモラリストの謀略によるものであり、天真爛漫な労働者はすべてにかかっているというのである。

それでは、著者は労働者にどのような行動を求めているのだろうか。「労働に対する労働者たちの常軌を逸した情熱をくじき、生産する商品を消費させるよう仕向けねばならない。」つまり、労働と賃金を求めるのではなく、労働時間の短縮と消費を追求せよ、と主張しているのである。労働や賃金よりも、時間短縮を。そして時間短縮による、消費の拡大・雇用の拡大を。こうした主張は、まさしく現代のものである。100年以上も前に大衆に歓迎された主張の先見性と普遍性が、いま立証されているようでもあろう。

次に、労働を中心とする歴史観を裏返しにするような、大迫力をもった著作が、ヨゼフ・ピーパー著（稲垣良典訳）『余暇と祝祭』（1988年、講談社）である。余暇を中核に据えて、文化と歴史が語られるのである。

ラファルグと同じように、ピーパーにとっても、「現代は労働というものを過大に評価する時代」である。しかし、このような時代、つまり精神的活動までも精神的労働という名前で、計画的な管理労働のなかにとりこんでしまうような時代（「絶対化された労働」）にあって、なおいべきである。「余暇がものごとのかなめであり、すべてはそれを中心に回転している。」余暇は、西洋文化を創造し、支えてきた基礎でさえある。

ここにいう「余暇」とはなにか。それは精神生活のひとつのあり方であり、労働が「理性」の作用であるの対比すると、「知性」による直感の作用。その目的も、「労働」のように社会的機能や実益への奉仕にあるのではなく、「世界を心の目でながめ、それらすべてはよいものだ、と肯定する態度」にある。それゆえ、余暇は無為や怠惰ではない。むしろ中世の人生観では、いそがしく労働して自己を見失

うことこそが「怠惰」で、「余暇を失う」罪悪と考えられた。余暇は、「余暇を為す」という、動的な作用の中にある。「労働者が特定の労働機能にしばられ、狭い環境の中に閉じ込められることから解放され、世界全体を観察し、存在するすべてのものと交わり一体となる」、そうした活動である。そして、真の余暇を実現するためには、「人間が、何物にもおびやかされることなく、真実に生きることのできる空間」、「人間が自由であり、真の教義をもつことのできる空間」が必要だ。ところが、そうした余暇の実現は、労働以外の価値を認めることのない「全体主義的な労働国家」では抜き差しならない困難に直面する。人々は、「合理性に徹した生産活動のプロセス」にあますところなく縛りつけられる。そして、労働以外には何も意味のある活動をなしえないし、考えつくこともできない、内面的に貧困になった「機能的人間」たちが、労働国家に奉仕している。労働のための休息ではなく、社会的機能・実益からはみでることが必要である。中途半端であってはならない。「真の『余暇』とは、実益と結びつくことなく、しかも何ものにも侵害されることのない、人間存在の富と豊かさにも属するすべてのもの、その総体をさしている」。

40年前にドイツでこの本を書いた著者が、現在の日本のことを知るわけではない。しかし、この本は、まぎれもなく「全体主義的労働国家」である日本の私たちのために書かれたかのようである。人間は、労働の機能だけを追求し、職業的能力だけに埋没できるのか。人間存在は、仕事だけで満足できるのか。筆者が繰り返し問いたすこれらの言葉に、胸を衝かれない者がいるだろうか。また、この書が戦争直後のドイツで書かれたことにも思いを起すべきである。戦後復興の混乱と喧騒の最中に、それでもこの余暇本質論は構想された。同じ時期に、日本にはそのような思想のころみがあっただろうか。戦後ドイツの、余暇制度の急速な発展を支持するバックボーンを、この書にみいだすことができるのである。

こうして、100年余り前のフランスで労働への情熱が糾弾され、50年前のドイツで余暇の本質が説かれた。ヨーロッパの余暇理論をこの2つの書物で語り尽くすつもりはないが、余暇の本質的理解というものを特徴づけることはできるのではないだろうか。そして、日本人の発想に何が欠けているかも、自ずから解ってこよう。

(のだ すすむ 大学院法学研究院教授)

## 紅山雪夫著『ヨーロッパの旅 城と城壁都市』

藤井美男

筆者は西洋経済史を専門にしているが、2000年度後期六本松でゼミナールの講義担当をすることになったとき、表題に掲げた書物を迷わずテキストに選んだ。経済学部生に限定せず、広く1年生ならば誰でも受講できる、という趣旨の講義であるということも大きな理由であるが(この点については後で触れる)それ以上に、西洋経済史 学生諸君に分かり易く言えば「ヨーロッパ史」のある側面という講義を長年にわたって担当した経験から、多少危機感を覚えていたからでもある。

というのも、例えば飛行機で合計16時間もかけ、相当な覚悟で渡った20年ほど前のヨーロッパ行に比べると、最近でははるかに安価で気楽に、いわゆる「欧米」(あるいはそれに近い場所)に行くことが可能となっており、そして実際、夏や年末年始に見られる多数の国外脱出者のことが、今や年中行事のニュースとして報じられるほどであるにも関わらず、4年生までをも含めた学生諸君が、我々教師の実感ほどには「欧米」のこと(歴史だけではない!)を知らない、という事実が授業中気づかされるようになったからである。たとえ現実に外国の土地を踏んだことがなくとも、新聞・雑誌・テレビ・映画・インターネットなどを通じ、あふれる情報から十分な「基礎知識」を持っているはず、と考えたのは浅慮であった。近年話題となっている、受験科目にない勉強は高等学校で全くしない、ということの影響だともまでは考えたくないが、それでも「世界史」を勉強してきた者とそうでない者とが、同じ教室でヨーロッパやアメリカのことを学ぶのが年々困難になってきているように感じられてならない。そして、「世界史」選択者の知識でさえも危ういのである。

「少人数ゼミナール」という講義で採り上げた上記テキストは、ごく一般向けに書かれた書物ではあるが、西洋の城や居住空間としての都市・家屋がどのようにして造られ、現在に至っているかを、豊富な写真と図版および物語性の高い文章叙述によって分かり易く説明している(西洋経済史の専門的見地からは不十分な箇所が少なくないがそれには目をつぶろう)。モット・ベイリー様式から始まる中世の城、ロンドン塔の由来、跳ね橋とその名残り、石落としに矢狭間の役割、中世都市そのままのローテンブルク、城壁都市として名高いカルカソンの過去と現在……。これはいわば、仮想の「ヨーロッパ訪問」であり、理系・文系を問わず、城・都市の歴史

や紀行、あるいは建築技術とその意味など複数の視点から「ヨーロッパへのアプローチ」を可能してくれる一冊なのである。

皮肉なことに経済学部生は受講しておらず、数名の受講生のうち大半が理系の1年生ではあったが、テキストを補完する意味でビデオ資料なども併用したことも手伝ってか、総じて歴史と建築技術という一風変わった接点を持つ書物を通じての勉強で、彼らも半年楽しく学んでくれたように思う。せっかく入学した1年時から「地理・歴史嫌い」ひいては「勉強嫌い」を出さないよう、あるいは、もしそうした傾向があるのならそれを払拭したいとも考え望んだ筆者の目論見は、少なくとも受講した1年生については達成されたのではないかと自負している。

これまでヨーロッパ史に関心のなかった諸君も、「新白鳥城」に彩られた本書を手に取り、一時の仮想現実を味わいながら、更なるヨーロッパ史の扉を開かれんことを。

(ふじい よしお 大学院経済学研究院教授)

## 「小林秀雄をお読みなさい」

### 青山太郎

六本松地区の教官という立場から、新入生に読んでもらいたい本を何かご推薦いただきたい。

これは困りましたな。ひとくちに六本松地区と言っても文系理系いろんな専門分野の教官がおりますからね。ひと昔前まで、六本松地区は教養部と呼ばれていました。つまり、大学教育の教養課程を担当するところです。その後組織の改変があって、言語文化部が独立したり、文系理系の大学院ができたして教養部は解体されましたが、しかし教養教育の理念そのものは、全学教育と名を変えて今も生きています。要するに、「新入生のための本」とおっしゃるのは、教養教育のことをお考えなんでしょう。

そのとおりです。教養教育の理念は未だに生きていどころか、その重要性はますますクローズアップされてきています。ところで、教養って、いったいなんですか？

いやそれがね、この歳になっても未だによく分からんのですよ。

学生に教養を教えようという教官が、それじゃ困るじゃありませんか。

だってしょうがないでしょう。本当に分かんないんだから。しかしね、教養が何であるかは言えないけれど、教養が何ではないかということなら、言えないこともない。教養ってのはね、知識や情報で

はないんです。これは知識と違って、右から左へ伝達可能なものじゃありません。教官は学生に知識しか与えることができない。学生は教官から知識以上のことを期待しないほうがいい。知識はもちろん貪欲に吸収すべきものですが、この知識が集積されてゆく過程で、その底に少しづつ沈殿してゆくなにものか、その集積の中から、学生が主体的に抽出してゆく知の精髓といったもの、これが教養です。

ははあ、教養とは、歴大な知識が蓄積されてはじめて獲得されるものだということですか。何はともあれ先ず知識を蓄積せよと。教養はその底に、砂金のように自ずと見つかるであろうと。

必ずしもそうではありません。ここが面倒なところなんです、人間或種の教養がないことには、そもそも知識や情報の蓄積はおろか、これを受けとることすらできないという一面が、教養にはある。知識を獲得するには、先ず教養が不可欠です。

それじゃ循環論法じゃありませんか。鶏と卵じゃあるまいし、知識と教養とどっちが先なんですか？

なあと、循環論法というのは一種の詭弁でしてね、実際に知識の獲得に努めている人間なら、そんなことには頭を煩わせませんよ。

それにしても、それじゃあ教官としてちょっと無責任じゃありませんか。教養がつくつかないは学生の努力次第、教官は知識を与えていればいいとおっしゃるんでしょう。

そんなことはありません。確かに教官は学生に、教養を口移して伝えることはできない。しかし、正しい知識の内に学生が教養への手掛かりを見出しうるような、最適の条件を整えることはできます。大切なのは、学生が自分でそれを見出すことです。自分で獲得した教養だけが教養なんです。他人の教養は役にたたない。参考書を挙げておきましょう。これとてすぐ役に立つ参考書じゃありませんがね。小林秀雄をお読みなさい。教養の見事な実例がここにあります。これは近代日本が生んだ最も優れた思想家のひとりです。福田恆存もいいんですがね、本が手に入りにくい。小林秀雄の本なら、新潮文庫や文春文庫で容易に手に入る。文春文庫の『考えるヒント』(全三巻)あたりから始めたらいいでしょう。現在新潮社から何度目かの全集が企画されていて、予約を募っていますが、遺憾なことに値段が非常に高い。ああいう本は図書館で買ってもらいたいと思います。小林秀雄の全集なんていうのはね、版さえ違えば幾通りあってもいい本ですよ。

(あおやま たろう 大学院言語文化研究院教授)

# 先輩から新入生のみなさんへ

## 浪漫的図書館利用のススメ

大学院人文科学府

修士課程2年 矢野杏実

図書館は出会いの場である。たくさんの新しい知識との出会いはもちろん、様々な人との出会いが待っている。大学の中で学部、学年入りまじったこんなにも多くの人間が行き交う場所は他にはない。ひとたび、あの物騒な入館ゲートをくぐれば、そこには新たな出会いが待ち受けている。ブラウジングルームで物憂げに雑誌を眺めているあなたが、ふと目を上げると誰かと目が合い、運命的な出会いが生まれるかもしれない。たくさんの机が並んだ自習スペースでは、周囲が黙々と勉強する中で辞書を枕に眠るあなたを見て「周りに流されない強い人！」と、ときめいてくれる人がいるかもしれない。閲覧室では太宰を片手に若者の苦悩を演出してみたり、ゲーテを開いて溜め息をついてみたり。そんな時誰かの熱い視線を感じたら、それはロマンスの訪れか、あなたの行動に不審な点があるかのどちらかである。もし幸いにも二人に恋が訪れたなら、手を取り合って地下の書庫へと降りていこう。膨大な数の本を収めた広い書庫、そこはまさに二人だけの世界...ではないのでご注意ください。書架の間には無言で本に見入っている人々もいるので、多少の配慮をお願いしたい。また、閉館ぎりぎりまで書庫の中に居ると電気を消されてしまうこともあるのでご用心を。今度こそ本当に二人だけの世界になってしまう。借りたい本がある時はカウンターで貸し出し手続きを済ませてからのお帰りを。そうしないと出口の警告ブザーが！学生生活に刺激が欲しい！というお二人にも、こればかりはお勧めできない。

## 情報サロン工学部分室の紹介

大学院システム情報科学府情報工学専攻

修士課程1年 焼山康礼

新入生の皆さん、九州大学へようこそ。皆さんは、各々の希望を胸に抱いて九大の門をくぐられたと思います。

1～2ヵ月程前、皆さんは、その希望を実現する為のステップとして、懸命な努力を行なわれてきたでしょう。その中で、図書館を存分に活用された経験をお持ちの方も多くおられると思います。大学生活においても、図書館の重要性は変わりません。近年のIT革命、国際化の流れの中で自己責任において情報の収集、解析、行動の決断を行わなければならない社会が形成されつつあります。そのような高度情報化社会の中で、知の宝庫である図書館を利用することは、自分にとって得るものが多いはずで

私が担当する情報サロン工学部分室では、ノートパソコン12台とレーザープリンタ1台が設置されており、皆さんが自由に使用することができます。更に新年度にはパソコン20台が増加設置されますので、新入生の皆さんが来室される頃は一段と利用しやすい環境になっていることだと思います。

各PCは、インターネットに接続されており、WWW (World Wide Web) 閲覧や文献検索、メール閲覧・作成が可能で、図書館を利用しながら、最新の世界の情報を取得することが可能です。また、Microsoft Office がインストールされていますので、レポートや論文、発表資料の作成にも利用することができます。

情報サロン工学部分室を利用することで、皆さんの大学生活にも新たな活力が生まれてくると思います。部屋は分かりにくいかもしれませんが、図書館の方に尋ねられればすぐに分かります。利用可能な時間は、平日9:00～19:30となっておりますので、ぜひ利用して下さい。それでは、皆さんの大学生活が充実したものとすることを心よりお祈り申し上げます。

## バイト生から見た図書館について

医療技術短期大学部

看護科2年 馬場 あゆみ

図書館バイトをはじめてから1年がたちますが、利用されている大勢の人と接しながら思うことは、図書館は、経済的にも時間的にも利用しやすく、みのりのある学生生活を送るためのよい情報収集の場になるということです。私も学生として医学図書館を頻繁に利用しています。資料の検索、参考文献調べ、テスト勉強の場としての利用が多いです。

初めての方にとっては、膨大にある本の中から自分の求めるジャンルの本を見つけ出し、それらの中から自分にみあった本を探し出すというのは大変に思えるかもしれません。図書館には情報サロンや検索端末がそろっているので、そちらを活用したり、カウンターを訪ねるなどして、容易に入手したい本を見つげだし学習にぜひとも役立ててほしいと思います。また学生ならば、グループでの話し合いをする機会も多くあると思います。集められた資料を使って、即時に仲間同士で学習活動ができる空間が用意されてあるので、利用されるのもよいと思います。空調設備も整っており、静かな環境で学習や調べ物が行え、しかも回りには同じ目的を持った人たちが図書館にはいるので、精神的にも良い影響を受けられるのではないかと思います。最後に、バイトの際、利用者から端末検索をする時に、本に載っている内容がわかればいいのという声が多くありました。その点が改善されたらもっとよい図書館になるのではないかと思います。



## 「本」を捨てた後で

大学院比較社会文化研究科

博士課程3年 森山 達矢

その昔、とある有名な競馬マニアが言ったそう。 「書を捨てよ、街に出よう」と。この言葉の意味するところは、今と昔では全然違っていると思う。かつて捨て去るべき「本」はたくさんあったけれども、今では捨て去るべき「本」はほとんどない。これは、本の「量」のことを言っているのじゃなくて、「質」のことを言っている。かつて読まれるべき本はたくさんあったのかもしれない。けど今じゃ、「読むべき本」=「古典」=「誰も読まない」という奇妙な三段論法が成立している。僕が言いたいのは、読むべき本もなければ、本なんてあんまり読まれていないということ。書を捨てる以前に、僕たちはすでに「本」から自由なのだ。自由な僕たちは、街という現実的な場所のみならず、ネットという空間にも、居場所を見つけている。

これは言うまでもなく、情報産業の進化による「情報過多」の産物だと思う。これについては、良いとも悪いとも思わない。けど、ただ一つ言っておきたいのは、この「情報過多」の中で、僕たちの身体をどう捌いていくのかということが、これから大事だということ。言い換えると、この時代に生きるすべをどのように身につけるのかということ。

そのためには本を読め！なんて野暮なことは言わない。本がすべてだなんて、そんな時代錯誤な。本なんて、今となっては一つの選択肢にすぎないし。ただ、僕が言いたいのは、生きるための知恵を得る一つの選択肢として図書館は存在しているということ。だけどそれは本を読むために来いということじゃなくて、人生を変えるような出会いがあるかもしれないよということ。(ないと思うけど。)まあ、そういったいろんな意味をもった場所として、図書館はあってもいいと思う。

ということで、みなさんの御来館を心よりお待ちしております。

## 平成12年度研究開発室の活動について

### 1 九州大学附属図書館における電子図書館システムの研究開発

室員：南 俊 朗

研究開発室助教授

イメージによる図書目録カード検索システムに関しては、システムの完成度の向上を図りました。特に、内部処理の再構成、管理者向け機能を増強しました。また、以下のような論文発表を行い、研究成果の公開に努めました。

更に、図書目録カードで採用した方式の新たな適用として、参考調査記録カードのイメージ化を行い、参考調査事例検索のためのシステムの研究を開始しました。その他、今後の図書館電子化を推進するための基礎となる可能性の高い、非接触型ICタグによる蔵書管理システムに関する、調査・研究を行っています。

また、ネットワークを利用した新しい情報サービスの要素技術として、英文作成支援システムや検索者のためのキーワード推薦システムに関する研究も行っています。

(文献リスト)

- ① Minami, T., Kurita, H. and Arikawa, S.: Putting Old Data into New System: Web-based Catalog Card Image Searching, Proc 2000 Kyoto International Conference on Digital Libraries (ICDL2000), pp 296-303, Nov. 2000.
- ② 松川伸一, 南俊朗: 図書目録カードイメージ入力のボトルネック 大量データの正当性を検証する, デジタル図書館, ISSN1340-7287, No.19, Nov. 2000.
- ③ 南俊朗, 栗田英和, 有川節夫: イメージによる図書目録カード検索システム 遡及入力問題の一解決法, デジタル図書館, ISSN1340-7287, No.18, Sep. 2000.
- ④ 山之上卓, 南俊朗, Ian Ruxton: 文書作成支援のための WWW コンコーダンサー, 第7回ソフトウェア工学の基礎ワークショップ (FOSE2000), Nov. 2000.
- ⑤ Yamanoue, T., Minami, T. and Ruxton, I.: Using the WebLEAP (Web Language Evaluation Assistant Program) to Write English Compositions, FLEAT IV (The Fourth Conference on Foreign Language Education and Technology), July 28-August 1, July 2000.
- ⑥ Oda, M. and Minami, T.: From Information Search towards Knowledge and Skill Acquisition with SASS, Proc 2000 Pacific Rim Knowledge Acquisition Workshop (PKAW2000), Dec. 2000.

### 2 九州大学附属図書館における電子図書館システムの研究開発

室員：竹 田 正 幸

大学院システム情報科学研究所助教授

電子図書館システムの研究開発：

電子図書館システム機能の増強および新機能開発を目指し、全文検索エンジンの高速化・高機能化、電子テキストからのデータマイニング、キーワード獲得、文書分類に関して研究を行いました。また、以下のような論文発表を行い、研究成果の公開に努めました。これらの機能は、今後図書館電子化が進んだ際に必要不可欠な技術となるものです。

(文献リスト)

- T. Matsumoto, T. Kida, M. Takeda, A. Shinohara, and S. Arikawa: Bit-parallel approach to approximate string matching in compressed texts, Proc 7th International Symposium on String Processing and Information Retrieval (SPIRE2000), pp 221-228, IEEE Computer Society, 2000.

Y. Shibata, T. Matsumoto, M. Takeda, A. Shinohara, and S. Arikawa: A Boyer-Moore type algorithm for compressed pattern matching, Proc .11th Annual Symposium on Combinatorial Pattern Matching ( CPM2000 ), pp .181 194 ,Lecture Notes in Computer Science 1848 ,Springer-Verlag 2000 .

Y. Shibata, T. Kida, M. Takeda, A. Shinohara, and S. Arikawa: Speeding up pattern matching by text compression, Proc 4th Italian Conference on Algorithms and Complexity ( CIAC2000 ), pp 306 316 ,Lecture Notes in Computer Science 1767 ,Springer-Verlag 2000 .

M. Takeda, T. Matsumoto, T. Fukuda, and I. Nanri: Discovering characteristic expressions from literary works: A new text analysis method beyond N-gram statistics and KWIC, Proc 3rd International Conference on Discovery Science ( DS2000 ), pp .112 126 ,Lecture Notes in Artificial Intelligence 1967 ,Springer-Verlag 2000 .

岡崎敬士, 山岡雅弘, 石野明, 竹田正幸, 松尾文碩: 科学技術文における共起情報を用いた関連語の抽出 2000年度人工知能学会全国大会 (第14回) 論文集 2000年7月 .

村上誠, 石野明, 竹田正幸, 松尾文碩: 単語の頻度情報の偏りを用いた文書の自動分類手法の提案 2000年度人工知能学会全国大会 (第14回) 論文集 2000年7月 .

### 3 九州大学附属図書館所蔵の貴重資料の画像及び 書誌データベース作成に関する研究開発

室員: 今西裕一郎

大学院人文科学研究院教授

「古活字版『枕草子』(十三行本)画像データベース(付・慶安二年刊整版本)

昨年度の『古活字版源氏物語』の画像データベースに引き続き、本年度は同じく古活字版の『枕草子』の画像データベースの開発に取り組んだ。幸い、本学附属図書館には支子文庫に、『枕草子』古活字版としては三番目に出版された、江戸初期刊の十三行古活字版が蔵されているので、それを用いた。ただ残念なことは、支子文庫本は全五冊のうち第五冊目を欠いており、その欠損を補い、かつ古活字版以降の『枕草子』流布本の実体をも窺うべく、慶安二年版の整版本(全七冊)を併せて、画像データベース化を行った。

検索は田中重太郎『校本枕冊子』に施された章段番号により、数丁以上にわたる長い章段には同じく『校本枕冊子』本文の各章段の行数を五行ごとに表示して、検索の便を計った。

一口に『枕草子』といっても、現存伝本は4系統分類され、互いに大きく異なった本文を持つ。そのうち今日、古典文学全集等で一般に読まれているのは、三巻本と呼ばれる系統の本文である。しかしこの三巻本が評価されるようになったのは近代、それも戦後になってからのこと。江戸時代に広く読まれていたのは、写本としてしか伝わらなかった三巻本ではなく、江戸初期から版本として流布した能因本とよばれる系統の本文であった。能因本に基づく江戸時代の注釈書『枕草子傍注』や『枕草子春曙抄』は、すでに冊子体の影印本として刊行されているが、江戸初期に出版された『枕草子』本文、すなわち古活字版や慶安版本は、今日ほとんど顧みられることはない。

しかし、江戸時代に芭蕉や西鶴や近松が読んでいたのは、この能因本系の本文であった。そのような『枕草子』の伝流、享受を考察するにあたって、江戸初期刊の二種の刊本を比較対照できる本データベースは有益な足がかりとなるであろう。

### 4 内外大学図書館の組織、運営及び サービスに関する調査研究

室員: 柳原正治

大学院法学研究院教授

内外の大学図書館を調査研究しており、今年度は、海外大学視察の一環として、カリフォルニア大学バークレー校及びスタンフォード大学(アメリカ合衆国)、モナッシュ大学及びオーストラリア国立大学(オーストラリア)、高麗大学、梨花女子大学、釜山大学及び慶山大学(大韓民国)等の各大学を視察し、新図書館構想等の参考にしている。

また、国内大学を調査研究するため、図書館職員が各大学へ研修出張した機会を捉え、新図書館構想等の



ための調査を行っている。その中には、次項の韓国との間における交流の推進に関連して山陰地方の鳥取県立図書館等の調査も含まれている。

なお、海外大学視察の結果は、毎年度行っているように「海外大学図書館視察報告」として報告書を発行する。

(研究開発室関連刊行物)

- ① 海外大学図書館等視察報告 第3集 アメリカ合衆国(中西部) 平成10年1月
- ② 海外大学図書館等視察報告 第6集 東南アジア(中央部) 平成12年3月

## 5 韓国との間における図書館間交流の推進に関する調査研究

室員: 松原孝俊

大学院言語文化研究院教授

平成12年度の前半は、文部省在外研究員としてアメリカ合衆国に滞在し、カリフォルニア大学 Berkeley 校所蔵韓国関係資料の調査に従事しながら、10ヶ月間にわたってアメリカの大学図書館の実情を視察しました。帰国後には、ソウル大学との学術交流を進展させるために、3度の訪韓を行い、双方の意見交換に努めました。

(文献リスト)

- ① 『言文フォーラム』第23号に掲載予定
- ② 『カリフォルニア大学 Berkeley 校所蔵朝鮮本目録』〔編集中〕

## 6 九州大学附属図書館所蔵の古書・文書データベース構築に関する調査研究

室員: 吉田昌彦

大学院比較社会文化研究院教授

ネットへの掲載を行うため、九州大学附属図書館六本松分館所蔵玉泉館資料三苦家文書(筑前怡土郡大庄屋文書)のデータベースの点検及び入力を行った。

## 7 医学分館所蔵貴重古医書のデータベース化及び医史的、書誌学的な調査研究

室員: Wolfgang Michel

大学院言語文化研究院教授

1999年に附属図書館医学分館保存図書館で古書が発見され、その後の調査で1870年代までの蔵書約1,300冊が確認された。ヨーロッパで貴重書とされるものもあり、書棚を購入して貴重図書室へ移し、損傷を止めるため、約550冊は脱酸処理を施した。目録作りは現在も続き、今年度末までに700冊を大学のOPACとNACISISのWebcatに登録予定である。ウェブサイトも作成中で、ここに貴重図書コレクション総索引を掲載。書物の解説、表紙や扉絵、本文などを公開し、ダウンロードできるようになる。仮設のサイトは<http://www.rc.kyushu-u.ac.jp/michel/ki-chotosho/>で見ることができ、目録完成後は検索機能も加え、任意の検索語からアクセス可能になる。



## 学生用図書(参考図書)の整備・充実について

平成12年度教育研究基盤校費から「図書館等の学生用図書の充実」のための経費が認められた。附属図書館ではこれを受けて次のような選書方針を定めた。

1. 本学図書館による調査において、辞書、事典、ハンドブックなどの学習知識の基礎となる参考図書及び、医学・歯学・薬学関係の新刊図書が不足しており、図書館利用者からもこれらの図書の充実を望む声が多く寄せられている。
2. このため、中央図書館、医学分館、六本松分館は参考図書を中心とした資料整備を行い、さらに、平成12年度設置された筑紫地区の中央図書室の学生用基本図書の充実を実施する。

### 中央図書館

中央図書館では上記の方針を基本にしつつ、改版・改訂された参考図書の収書をも行う方向で資料選定委員会を開催し、各課の要望も取り入れて700冊の参考図書を含む約900冊の選定リストを作成の上、購入しました。特に不足していた言語学、情報学分野の参考図書の充実を行いました。また、新たに受入れた参考図書を多数配架するため、参考閲覧室の辞書・事典・便覧等を配架していた木製低書架をスチール製書架(6段)と入れ替えて収納スペースの増加を図りました。

### 医学分館

この度、学生用図書整備費の配分を受けて新・改訂版の補充や未収書の整備をしました。各国語辞書、医・歯・薬科学系の事典類だけでなく、医療と社会の変化を考慮して収書範囲を広げています。主な配架場所は、2階の二次資料室です。

### 六本松分館

六本松分館では例年、学生用参考図書経費として約150万円程度を予算化して執行していますが、本年度は更に全学的に確保された財源による学生の教育環境の整備費として300万円の配分を受けました。これは主旨どおり、学生が主に利用する参考図書類を選定し購入しました。冊数で約200冊に及び六本松地区の特性である全分野にわたる選書を行いました。

たがユニークなものはアジア諸国語の辞典類や日本映画作品辞典(全6巻)など従来は揃えられなかった分野もカバーできました。学生等の利用者のために経常に予算化され参考図書類の一層の充実を希望します。

### 筑紫中央図書室

筑紫地区キャンパスには、学生が利用できる図書室が無いことから、本年度5月15日に「筑紫中央図書室」が開室しました。このため、学生用資料の収集はゼロからのスタートであり、「学生用図書の整備充実費」は、「筑紫中央図書室」にとっては、まさに乾季の雨のように、恵みのものでありました。

「筑紫中央図書室」は他の分館とは異なり、その「方針」にあるように、参考図書ではなく、学生用図書の充実重点をおきました。現在図書室では、さらなる学生用図書充実のため「筑紫地区協議会図書専門委員会」、「システム情報科学研究院図書委員」及び「留学生担当教官」の方々に、学生用図書の推薦をお願いしています。

また、地区内の図書室等に、「図書室についてのアンケート及び図書購入申込書」を配置し、学生の希望にそえる充実した図書室にするため努めています。この結果、本年度は、寄贈図書等を含め三千数百冊の図書を配架する予定で、現在閲覧だけの利用から、来年度には、貸し出しも可能となります。

来年度以降も、学生用図書資料の充実及び図書情報サービスの向上を目指していきます。

## 平成13年度開学記念・ 附属図書館の開放について

附属図書館では、5月11日の本学開学記念（90周年）行事・学内の施設開放の一環として、下記のとおり公開展示及び公開講演会を開催しますので、多数のご来場をお待ちしています。

### 【1】公開講演会

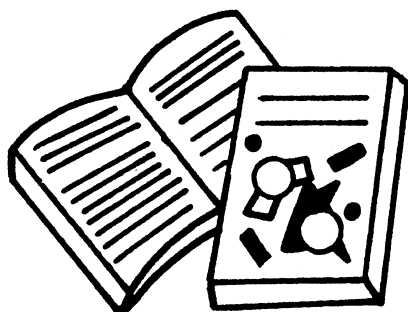
日 時：平成13年5月11日(金) 13:30～15:00  
場 所：中央図書館4階視聴覚ホール  
演 題：江戸の「小説」  
講 師：文学部名誉教授 中野三敏氏

### 【2】第42回中央図書館貴重文物展観

日 時：平成13年5月10日(木)～16日(水) 10:00～16:00  
場 所：中央図書館2階展示コーナー  
テーマ：「小説」の誕生 - 江戸読本の流れ -  
展観資料：中央図書館所蔵の貴重書「読本コレクション」を中心に展示

### 【3】医学分館公開展示

日 時：平成13年5月7日(月)～12日(土) 10:00～16:00  
場 所：医学分館  
展示資料：貴重古医書、及びピカソのリトグラフ作品等40数点



# 平成13年度附属図書館開館等スケジュールについて

## 所在地及び利用時間等

		中央図書館	医学分館	六本松分館	筑紫分館
所在地	住所 電話	福岡市東区箱崎6 10 1 (092) 642 - 内線番号	福岡市東区馬出3 1 1 (092) 642 - 内線番号	福岡市中央区六本松4 2 1 (092) 726 - 内線番号	春日市春日公園6 1 (092) 583 - 内線番号
利用	開館期間	平成13年4月3日～ 平成14年3月31日	平成13年4月1日～ 平成14年3月31日	平成13年4月1日～ 平成14年3月28日	平成13年4月2日～ 平成14年3月30日
	開館時間				
	平日	9:00 - 20:00	9:00 - 21:00	9:00 - 20:00	9:00 - 20:00
	土・日・祝日	10:30 - 18:00	9:30 - 17:00	10:00 - 17:00	9:00 - 17:00(土曜のみ)
	*短縮開館時	9:00 - 17:00		9:00 - 17:00	
	*延長開館	9:00 - 21:00		9:00 - 21:00	
お問い合わせ	電話 閲覧 レファレンス 文献複写 Facsimile	(092) 642 - 2337 " 2338 " 2334 (092) 642 - 2340	(092) 642 - 6037 " 6040 " 6039 (092) 642 - 6042	(092) 726 - 4810 " 4551 " 4552 (092) 726 - 4811	(092) 583 - 7020 " 7514 " 7020 (092) 583 - 7515
備考	*短縮開館：中央図書館（春季休業期及び8月の最終週を除く平日） 六本松分館（春季休業期、7月16日～8月10日及び平成14年3月11日～3月20日の平日） *延長開館：中央図書館（試験期 9、1、2月の平日） 六本松分館（前期、後期の定期試験一週間前～試験期間中）				

## 休館日

休 閉 館 日	休 閉 館 す る 図 書 館 及 び 期 間			
	中央図書館	医学分館	六本松分館	筑紫分館
月始めの平日(書庫整理等)	休館		休館	
春季休業期の土、日曜日	休館			
曝書・図書点検期間(8月中旬の1週間)	休館 8月13日～8月17日	休館 8月11日～8月19日	休館 8月13日～8月17日	休館 8月13日～8月15日
8月中の土曜、日曜日	休館		休館	休館
年末・年始	休館12月28日～1月4日	休館12月28日～1月6日	休館12月28日～1月6日	休館12月28日～1月6日
大学入試センター試験			休館1月19日～1月20日	
入学者選抜個別学力検査			休館2月25日～2月26日	
年度末図書点検			休館3月21日、22日、25日、 27日、29日、30日、31日	

その他、やむを得ず休館や開館時間を変更する場合がありますので、ご注意ください。  
 その場合、事前に図書館掲示板、広報等でお知らせします。

## 時間外及び休日開館時のサービス業務

時間外（平日午後5時以降）及び休日開館時におけるサービス業務は各館とも以下のとおりです。

実施するサービス業務	備 考
一般資料閲覧	
一般資料の貸出・返却	
館内複写	
プリペイドカード方式	（六本松分館、筑紫分館不可）
コイン方式	（筑紫分館不可）
情報検索	
目録検索	
CD-ROMサーバシステム	
図書館利用者票	
申請受付	（中央図書館、六本松分館不可）
交付	
演習室の利用	（六本松分館、筑紫分館不可）

注：レファレンス業務等時間外は実施していない業務もあります。

## 人事異動

(平成12年12月～平成13年2月)

(中央図書館)

12. 1 芦北 卓也 情報システム課データベース掛(事務補佐員)採用  
 " 大石 絢子 情報システム課データベース掛(事務補佐員)採用  
 " 岸本 麻里 情報システム課データベース掛(事務補佐員)採用  
 " 飛松 奈緒 情報システム課データベース掛(事務補佐員)採用  
 " 八田 ゆみ 情報システム課データベース掛(事務補佐員)採用  
 " 菱川 辰也 情報システム課データベース掛(事務補佐員)採用  
 " 村瀬喜久子 情報システム課データベース掛(事務補佐員)採用  
 " 山口 徹郎 情報システム課データベース掛(事務補佐員)採用  
 " 芳崎 若子 情報システム課データベース掛(事務補佐員)採用

(医学分館)

12. 31 工藤瑠美子 (閲覧掛)(事務補佐員)辞職  
 1. 1 阿世知奈々 閲覧掛(事務補佐員)採用

## 図書館日誌

(平成12年12月～平成13年2月)

12. 1 九州地区国立大学図書館 事務(部・課)長会議(中央図書館)  
 5 中央図書館玄関ホール天井改修工事(27日まで)  
 7 第13回国立大学図書館協議会シンポジウム(8日まで)(名古屋大学)  
 8 仕様書(案)説明会(中央図書館)  
 12 図書館新任職員研修(中央図書館)  
 28 仕事納め  
 1. 4 仕事始め  
 9 外部評価打ち合わせ(第2回目)(中央図書館)  
 10 館長会議(中央図書館)  
 " 第173回図書館商議委員会(中央図書館)  
 12 「Web of Science」図書系職員講習会(中央図書館)  
 " 九州地区大学図書館協議会幹事館・副幹事館会議(中央図書館)  
 24 第4回図書館情報編集委員会(中央図書館)  
 25 国立大学附属図書館事務部長会議(徳島大学)  
 2. 2 九州管区行政評価局行政評価・監視調査(中央図書館)  
 7 全学図書系掛長会議(中央図書館)  
 9 レファレンスDB連絡会(中央図書館)  
 15 福岡県・佐賀県大学図書館協議会第2回福岡地区研究会(第一経済大学)  
 " 大学図書館情報化促進会議(学術総合センター)  
 16 大韓民国へ出張(松原教授、田村、林田、園田)(18日まで)  
 20 NACSIS - CAT/ILL 講習会担当者会議(国立情報学研究所)  
 22 福岡市総合図書館との調印式(中央図書館)  
 26 館長会議(中央図書館)  
 " 第174回図書館商議委員会(中央図書館)  
 " 総合目録データベース品質管理会議(国立情報学研究所)  
 27 資料保存講習会(1回目)(中央図書館)

# 自 著 紹 介

**長 智男** (農学部名誉教授)

『世紀を拓く砂丘研究：  
砂丘から世界の砂漠へ』

[中央図書館 454.64 / N 71]

「砂丘は不毛の地」、この思想は現代でも世界に通じる言葉ですが、この砂丘地の農業利用に挑み半世紀が過ぎたいま、わが国の砂丘地は沃野へと変貌しました。この事実は世界に例をみない偉業であり、農耕文化をもつ日本の農業技術の確かさを示すものと考えています。

**吉澤卓哉** (経済学部客員助教授)

『企業のリスク・  
ファイナンスと保険』

[中央図書館 339 / Y 94] [法学部 Pj20 / Y / 58]  
[経済学部 339 / Y 94]

企業は実に多様なリスクを抱えながら事業活動を行っている。ある意味では、リスクをとることこそが事業の本質を成している。

こうした企業のリスク (enterprise risk) に関しては、当然のことながら適切な管理が求められる。このリスク管理がリスク・マネジメント (risk management) である。リスク・ファイナンスとは、リスク・マネジメントのうちのリスクの金銭的処理の問題であり、そこで保険は重要な役割を果たしてきた。

本書は、ファイナンス保険、保護セル保険会社 (レンタ・キャプティブの特殊形態)、事業活動保険、生命保険の損害率といった、企業のリスク・ファイナンス計画の策定に役立つ最新保険事情や新しい分

析視点を提供するものである。リスクを抱える主体としては企業を想定しているが、政府、地方公共団体、特殊法人等の機関が抱えるリスクについても、十分に当てはまる内容となっている。

**岡本英明** (大学院人間環境学研究院教授)

『解釈学的教育学の研究』

[中央図書館 371.1 / O 42]

本書は、教育哲学を専攻する筆者が過去30年の間に発表した学術論文の中から10篇を選んで、それをⅠ「解釈学的教育学の学理論」、Ⅱ「解釈学的教授学」、Ⅲ「メルヘンの解釈学的教育学的考察」の三つの研究分野のカテゴリーに大別して編集したものである。

Ⅰでは教育学の科学性を学理論論争を踏まえて検討し、次いで解釈学的教育学の理論形成に対する実践哲学の認識モデルの射程を論究し、さらにデイルタイ、ミッシュ、ボルノウの思想的系譜を解明した。Ⅱではボルノウのチュービンゲン学派の解釈学的教授学の研究をテーマとして、「構成的教授学」の理論構造を究明し、次いで現在の教師養成のテクノロジー的思考への疑念から「テクネーの学」としての教育学と人間疎外からの復路としての教育学の理性批判を展開し、さらにミューズの=美的教育論の特質を論じた。Ⅲでは子どもの絵画とメルヘンとの親和性 (平面性) を考察し、さらにメルヘンの美的教育学的次元と解釈学的、教育学的視点とを論じた。

**矢山英樹 (大学院理学研究院助教授)**

『超低温の実験技術』

[ 六本松分館 426.7 / U 59 ]

旧ソビエト連邦は、低温物理学の分野でも多くの有名な科学者を輩出しており、理論と実験の両面で多くの貢献をしてきた。中でも、ハリコフ市にあるウクライナ科学アカデミー低温理工学研究所は、低温物理学および低温工学を専門とする、旧ソビエト連邦の中で最大の研究所である。そこに所属する7人の研究者が分野別に著した低温および超低温の生成と測定法に関するロシア語の専門書を翻訳したものが本書である。低温物理・工学の研究者にとって実験のガイドブックとなるよう、多数の文献から集めた実験データの詳細な図や数表が与えてある。また、物理的な基本原理から、具体的な装置のサイズまで幅広く記述してある。本書は、原著の内容に加え、訳者補遺として最近の液体ヘリウムを用いない希釈冷凍機や、新しい原理に基づくクーロンブロッケード温度計なども紹介している。低温および超低温の実験を行なう研究者や学生にとって、実用書としての価値の高い一冊である。

**梶原壤二 (数理学研究科名誉教授)**

『Finite or infinite dimensional complex analysis: Proceedings of the Seventh International Colloquium』

[ 中央図書館 413.04 / I 57 ]

1999年8月福岡県社会教育総合センターに於いて第7回国際有限無限次元複素解析会議を開催した。そこで発表された研究を基に、一から多複素変数に到る関数論及び新興の学問である無限次元複素解析、更には、四元数、八元数から Clifford 代数を変数とする関数論の最先端の研究を収めた論文集である。例えば、寄贈者の専門である無限次元複素解析学に

付いては、2・3名を除いて、世界の斯界の最高権威から新進に至る99年の時点に於ける第一線の研究を網羅していると自負している。第二、第三編集者の専門、タイヒミュラ - 空間や複素力学に於いても然り。この様に、複素・Clifford 解析の99年の時点に於ける最先端の研究を網羅した論文集であるから、establish された研究者には好敵手等の最近の研究を知り、自己の研究を、global standard による偏差値にて、自己評価する為の格好の素材であり、今から有限・無限次元の複素・Clifford 変数の関数を研究しようとする四年生及び大学院生には、近未来に読むべき論文を教える格好の指針である。

**梶原壤二 (数理学名誉教授)**

『Proceedings of the Second ISAAC Congress』

[ 中央図書館 413.04 / I 57 / 1、2 ]

Isaac 卿 Newton 以来の「人類の調和と進歩」に寄与する数学を目指す我々が評価されて日本万博記念協会より補助金 No.1156 を頂き、1999年8月福工大にて第二回 ISAAC 大会を開催した。この二巻1,617頁に及ぶ大冊は万博補助金に基く同 Proceedings である。上の趣旨に伴い、複素解析は元より、関連する複素力学、複素数値解析学、偏微分方程式論、更には、音響学、数理生物学等の実質科学の最先端の研究論文をも含む。この様に、先験科学たる数学に閉じこもることなく、Newton の伝統を受け継ぐ解析学の99年の時点に於ける最先端の研究を網羅した論文集であるから、完成された研究者には好敵手等の最近の研究を知り、自己の研究を、global standard による偏差値にて、自己評価する為の格好の素材であり、今から研究しようとする四年生及び大学院生には、近未来に読むべき論文を教える格好の指針を与える辞書である。この本はWSを通じ電子的に編集した。万博記念協会、福工大、数理WSに心から感謝します。



〔中央図書館〕

長 智夫（農学部名誉教授）

「世紀を拓く砂丘研究:砂丘から世界の砂漠へ」

日本砂丘学会編

農林統計協会 2000

[中央図書館 454.64 / N 71]

吉澤卓哉（経済学部客員助教授）

「企業のリスク・ファイナンスと保険」

吉澤卓哉著

千倉書房 2001

[中央図書館 339 / Y 94]

[法学部 Pj20 / Y / 58]

[経済学部 339 / Y 94]

岡本英明（大学院人間環境学研究院教授）

「解釈学的教育学の研究」

岡本英明著

九州大学出版会 2000

[中央図書館 371.1 / O 42]

山田治徳（大学院法学研究院助教授）

「建設国債の政治経済学：なぜ投資国債論を提唱するのか」

山田治徳著

日本評論社 2000

[中央図書館 347.21 / Y 81]

今田盛生（大学院農学研究院教授）

「千里蹴波行」

九州大学水泳部編

九州大学水泳部後援会 2000

[中央図書館 377.28 / Ky 9]

菅野道廣（農学部名誉教授）

「「あぶら」は訴える：油脂栄養論」

菅野道廣著

講談社 2000

[中央図書館 498.55 / Su 25] (2冊)

## 本学関係者著作寄贈図書

蔵書の充実を図るため、図書館では著作物刊行の節は一部ご寄贈くださるようお願いしております。今回は次の教官からご寄贈いただきました。厚く御礼申し上げます。

宮本一夫（大学院人文科学研究助教授）

「中国古代北疆史の考古学的研究」

宮本一夫著

中国書店 2000

[中央図書館 222.5 / Mi 77]

吉川 敦（大学院数理学研究院教授）

「無限を垣間見る」

吉川 敦著

牧野書店 2000

[中央図書館 410.9 / Y 89]

梶原壤二（数理学研究科名誉教授）

「Proceedings of the Second ISAAC Congress」

Heinrich G. W. Begehr, Robert P. Gilbert, and Joji Kajiwara (eds.)

Dordrecht ; Boston : Kluwer Academic Publishers 2000

[中央図書館 413.04 / I 57 / 1、2]

梶原壤二（数理学研究科名誉教授）

「Finite or infinite dimensional complex analysis : proceedings of the Seventh International Colloquium」

Joji Kajiwara, Zhong Li, Kwang Ho Shon (eds.).

New York : Marcel Dekker, c2000

[中央図書館 413.04 / I 57]

〔六本松分館〕

矢山英樹（大学院理学研究院助教授）

「超低温の実験技術」

ウクライナ科学アカデミー低温物理工学研究所編  
矢山英樹、I. B. ベルクトフ共訳

九州大学出版会 2000

[六本松分館 426.7 / U 59]



九州大学附属図書館ホームページから多くのデータベースが利用可能です。

学内 LAN (KITE) に接続されていれば、研究室から利用できます。ホームページの URL は次のとおりです。

<http://www.lib.kyushu-u.ac.jp/index-j.html>

- ①九州大学蔵書検索 (OPAC) - - 学外から利用できます。
- ②全国大学図書館蔵書検索 (Webcat) - - 学外から利用できます。
- ③OVID CD サーバ検索 - - Current Contents 等、ユーザ登録が必要です。
- ④NSCDNet CD サーバ検索 - - 雑誌記事索引等、学内利用です。
- ⑤Web of Science: SCI Expanded - - 自然科学系引用文献、学内利用です。

## \* \* 図書館情報記事訂正のお知らせ \* \*

前号 (第36巻第3号) の「電子ジャーナルの紹介」(p.40 - p.45) の電子ジャーナル・リストの中で、下記の雑誌の冊子体の配架場所が変更になりましたので、お知らせいたします。

- 35 Bulletin of volcanology / International Association of Volcanology and Chemistry  
誤 (工・資源工学) 正 (工・地球資源)
- 94 Journal of composites for construction  
誤 (工・図書室) 正 (工・建設)
- 95 Journal of construction engineering and management  
誤 (工・図書室) 正 (工・建築)
- 98 Journal of engineering mechanics / American Society of Civil Engineers. Engineer  
誤 (工・図書室) 正 (工・建築)
- 119 Journal of structural engineering 誤 (工・図書室) 正 (工・建築)
- 130 Journal of waterway, port, coastal, and ocean engineering / American Society . . .  
誤 (工・水工土木) 正 (工・都市環境)
- 134 Magazine of concrete research / Cement & Concrete Association  
誤 (工・図書室) 正 (工・都市)
- 173 Proceedings of the Institution of Civil Engineers. Civil engineering  
誤 (工・図書室) 正 (工・建設)
- 174 Proceedings of the Institution of Civil Engineers. Structures and buildings  
誤 (工・図書室) 正 (工・建設)
- 177 Proceedings. Mathematical, physical and engineering sciences  
誤 (工・船舶海洋) 正 (工・海洋)

( ) 内は、冊子体の配架場所。

九州大学附属図書館報「図書館情報」 Vol. 36, No. 4 (通巻198号)

編集発行 九州大学附属図書館 2001年3月31日

〒812-8581 福岡市東区箱崎6丁目10番1号 電話(092)642-2336 (ダイヤルイン)